慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ロオドベルトスの経済学説補遺（三、完）
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.3 (1921. 3) ,p.371(61)- 401(91)
JaLC DOI	10.14991/001.19210301-0061
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210301-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

から多年生命保險料に認められて居つた免稅の特典を廢止するのが至當であると云ふ說もあつたが、是れは餘りに純理に偏した議論とせざるを得ない。生命保險に關する寬典で、貯蓄を奬勵することは、最も簡單であり、又實行的でもあり、一方に所得稅納稅者の大多數は此貯蓄の形態を利用して居るので、最も廣く寬典を一般に及ぼし得る道理であつて、委員會も是等の理由から、生命保險料に對する寬典を繼續することを承認した。然し現行法に比較して、種々の改正を加へることを必要とし、大體左の如き提案を試みたのである。

（一）千九百十六年六月二十二日以後締結された保險契約に於ては、生命保險料に對する寬典は稅率を半額とする形で行はれること。

（二）千九百十六年六月二十二日以前に締結された保險契約に於ては、所得一千磅以下の者に在つては、稅率を半額とし、所得一千磅以上二千磅以下の者に在つては、稅率を四分の三とする形で、寬典を與へること。

ロオドベルトスの經濟學說補遺（三、完）

小泉信三

十二

Rodbertus は進んで先づ孤立經濟に於ける資本に就て上記の四問に答へる。既に前說に說明した通り、孤立經濟に於ては人は有ゆる社會的關係から離れて直に外界自然に對立する。從て吾人は此處に全く社會的關係に制約せらるゝ事なき自然的生產行程を認識することが出來る。然らば此場合に資本は何を以て成るか。人は其欲望を滿たす爲めに絕えず成る可く生產的に勞働しなければならぬ。然るに熟果の採取と云ふが如き最低度の生產行爲以外の場合に於ては人は欲望充足手段を作出する爲めには先づ道具と原料とを生產しなければならぬ。此の道具と原料とが（Rodbertus に從へば）資本であつて、それを以て、且つそれから造られた欲望充足手段は所得を形成するのである。別言すれば「資本……は更に生產の

爲めに供用せらるゝ生産物、所得は直接欲望の充足の爲め役立つ生産物である。」前者は猶ほ勞働に俟つところある豫行勞働後者は直ちに享樂に接する完成勞働である。(234-5)從來經濟學者は屢々生産者が生産中に消費する生活資料を資本と認めようとするが、Rodbertusが是説の誤謬を指摘することは甚だ痛切である。謂へらく、此見解を徹底せしむる時は或は全然資本と所得との區別を廢止するか、又は此の二概念の顚倒に到着するの外はない。成程人間は絶えず其欲望を滿たす爲めに、絶えず勞働しなければならぬから、新勞働に從事しつゝ常に既往勞働の所得を享樂する。彼は生産しつゝ消費し、消費しつゝ生産する。併し彼は生産する爲めに消費するのではなくて、消費する爲めに生産する、享樂せんが爲めに所得を造出すのである。故に若しも「彼れが生産しつゝ消費するところのものが、資本である可きものならば、……彼れが消費しつゝ生産するもの、即ち道具及び原料は所得でなければならぬか、或は……一切のもの即ち道具原料及び生活資料は擧げて資本となり、所得の概念は消滅しなければならぬであらう」と。(233-4)

Rodbertusは又勞働生産力の増進を資本に歸する説を否認する。資本は既述の如く道具と原料とから成るものであるが、原料は生産力の増進と共に増加するのを常とするけれども、此増加は彼の増進の原因ばかりではなくて、寧ろ結果に外ならぬ。又、道具に就て云へば、成間程人間は其勞働を一層生産的ならしめる爲めには通常直ちに欲望充足手段の生産に其勞働を向けずに、先づ道具に之を向ける。して造るところの道具が精巧であればあるに從つて、勞働生産力は増進するのが而常である。併乍ら資本發生以前から生産力の増減はあり得る許りでなく、資本が増加する事なく、否な却て減少しながら、生産力が増進する事があり得る(精巧なる道具に由て生産力は増進するが、此道具の生産に要する勞働量は從來よりも大ならざる場合)から、畢竟「生産力の増進は資本に歸せらるべきものではなくて、勞働にのみ歸せらるべきものだ」と云ふのである。(235-39)又彼は資本の本質を蓄積量(Vorrath)に求める説をも斥ける。資本の本質は更に生産の用に供せらるゝ生産物たるの一事にあつて、其量の大小、持續時間の長短は問ふ事を須ゐないと云ふのである。(239-40)

十三

次に孤立經濟に於て資本は如何にして發生し、如何にして增加するか。答に曰く資本は勞働に由て發生し、勞働に由て增加すると。

資本の發生に關する有力なる一說は資本は貯蓄に由て發生すと主張する。併し原料及び道具が如何にして貯蓄に由て發生し得るか。若しも貯蓄と云ふ事が消費せずして保存すると云ふ意味ならば、それは貯蓄するより前に先づ存在しなければならぬ。或は之を道具を作る爲めにはその間己れを支へる丈けの食料を先づ貯蓄しなければならぬと云ふ意味に解釋しようか。併乍ら若し孤立經濟主體が手から口に生活する狀態に在つて、道具を製作するの餘時がないとすれば、彼れは勿論其食料を貯蓄する事は出來ぬ。之を行ふ前には先づ勞働生產力の增進と云ふ事がなければならぬ。生產力の增進に由て從來全然生活必須物の獲得に充てられた勞働に餘裕を生ずるに至て、始めて此の餘裕勞働を道具の製作に充當する事が出來るのである。故に孤立經濟主體をして食料以外の或者を生產する事を得せしめる丈けの食料を以て彼の最初の資本なりとするも、或は最初の道具及び原料を以てそれなりとするも、直接資本物體を造るものが常に勞働のみなると同じく、又斯る資本の發生を可能ならしめるものは勞働生產力の增進のみであつて貯蓄ではない。」

資本の發生が勞働に由ると同じく、資本の增加も亦勞働に由るので、貯蓄に由るのではない。抑も資本の增加と云ふ言葉は、二の意味に解釋され得る。資本を形成する生產物量の增加と云ふ意味と、資本の爲めに費やされた(或は資本が代表する)勞働量の增加と云ふ意味とである。前の意味での資本の增加ならば、それは勞働生產力の增進に基づくものであるし、後の意味での資本增加ならば、それは勞働その者の增加に基づくものであつて、何れの場合にも貯蓄の增進に基づくものではない。(此處に謂ふ勞働その者の增減は一日中の勞働時間の延長若しくは短縮と過去に關したる勞働時間の長短とに依て決せられる。此理を一國民の上に移せば國民資本の增減は勞働人口の增減と國の新古とに依て決せられると云ふ事が出來やう)

資本が勞働に由て發生し、勞働に由て增加すると同じく、資本は勞働の反復 Wiederholung der Arbeit に由てのみ再生產せられる。茲に資本の再生產と稱するのは、

道具及び原料の消耗の補充を意味するが、斯る補充が Rodbertus の立場からすれば勞働に由ての外之を行ふ途がないのは説明を俟たぬであらう。

最後に資本は所得に對して如何なる關係に立つか。Rodbertus は此問に答へる事に依て旁ら資本を以て所得の源泉となし、資本と所得との間に因果關係を認める經濟學者の妄を辨じようとする。彼の見る所に從へば豫行勞働たる資本と、完成勞働たる所得との間には「源泉と水流、原因と結果、生産原力と生産物」との關係はなくて兩者は「單に連續繼起の關係に立つに過ぎぬ。」例へば人が樹枝を折取つて、それを以て果實を打落したとすれば、此の棒片は彼の資本であるが、打落された果實なる所得を以て此棒片の生産物とは認める事が出來ぬ。此場合の所得は「棒を折取る勞働と棒を揮ふ勞働との生産物」に外ならぬ。前者は果實を獲得せんとする勞働の第一歩に外ならぬのである。之を一般的に云へば孤立經濟主體は成るべく多額の所得を得んが爲めには、先づ原料と道具との生産を以て其勞働を始め、次で其道具を以て原料に加工する勞働に移り、遂に斯くして所得に到達する道程を經なければならぬのである。然るに原料は全然、道具は部分的に消耗することに依て、資本は絶えず所得に變形しつゝある。前者は後者の第一歩に過ぎずして、資本も所得も共に等しく勞働、而かも勞働のみの生産物である。先づ資本生産なる道程を迂回することに由て生ずる所得の增收は勞働にのみ歸すべきものである。たゞ其勞働は經濟主體が同一量の勞働を一層有利に投用する事、即ち一層よく自然を驅使する方法を解することに依て、其生産力を高めて居ると云ふに過ぎぬ。即ち、一言にして云へば所得增收の勞働生産力の增進のみから生ずるのであつて、更に資本と稱する、本質上勞働とは別の特殊の働因として參加する第二の要素からではない」「孤立經濟主體の所得は資本の大小に由て或は大或は小である。併しそれは資本が所得を生むから、それの創造者であるばかりでなくて、兩者共に兩者以外に立つ同一なる力、即ち勞働の所産であるからである。その勞働は所得を作り、又所得に達する道程上に於て所得の第一歩たる資本を作らなくてはならぬに由て、また等しく資本と所得とに現はれなければならぬのである」(253-4)

十四

Rodbertus が資本の本質を明にする爲め、遡つて孤立經濟下に於ける資本に關す

る一見無用の嫌ある思辨を以て論究を始めるのは、姑らく人對人の關係を無視し、人對物の關係のみを取て見れば、孤立經濟は分業及び所有權の爲めに外觀遙かに複雜なる文明社會の縮圖を示すもので、孤立經濟下に於ける資本に就て云はるゝと正に同一の事は、資本及び土地私有の有無に拘らず、國家經濟内に於ける國民資本(國内に現存する資本物體の綜合)に就ても云はれるからである。たゞ土地及び資本私有の行はれざる社會に於ては、現在社會に於けるが如く、私的資本の爲めに資本本質の確認を妨げられる事がない爲め、此理は一層容易に了解する事が出來る。そこで彼れは先づ社會主義社會の下に於ける資本に就て既記の四問を提出し、之に對して、孤立經濟に於けると同一の解答を與へ、且つ其理由を說明する。

土地資本の私有なき社會に於て國民資本は何を以て成るか。此場合の國民生産は孤立經濟に於ける生産よりも遙かに複雜で、縱に原生産 Rohproduktion、半製造 Halbfabrikation 製造 Fabrikation の諸段階に分れ、更に各階段は横に幾多の生産部門に分れ、(例へば原生産が狩獵、漁撈、牧蓄、耕作、採鑛に分るゝが如く)更に各部門は幾多の生産經濟又は經營(Unternehmungen)に分れて行はれ、國民中特殊の階級か各之を擔當する。而して各種の原生産業に於て自然から採取せられた原生産物は半製造の原料となり、半製造物は製造業の原料となり、斯くして順次生産段階を歷進して最後の段階に於て享樂財又は欲望充足資料なる完成狀態に到達する。同時に別に機械及び道具の生産を擔當するものがあつて、各階段各部門に於て要せらるゝ道具機械の供給補充を掌る。而して各生産部門の最後階段に於て、完成の狀態に達した享樂財は、社會其者及び社會を構成する個人の間に分配せられて各その欲望充足の用に供せられる(既記の如く社會その者の受ける配當額は、公權に由て規定せられ、各個人の收める得分は各人の價値生産額に應じて定まるの)であるが、此の最終生産段階に於て完成し、直接社會的欲望の充足に供用せらるゝ財が國民所得を形成し、此所得がそれを以て、且つそれから作出される一切の道具と原料とが國民資本を形成する。即ち此場合に於ても、國民資本の本質はそれが國民生産物中の更に生産の用に供せらるゝ部分、即ち更に勞働に依て繼續さる可き豫行勞働たる事に存し、國民所得の本質は國民生産物中の終局消費に供用せらるゝ部分たること、即ち完成勞働たる事に存するのである。(259-60, 264)

十五

Rodbertusは此處でも再び勞働者を養ふ生活必要品を資本と認める一部學者の通說の妄を辨ずる。謂へらく、土地資本の私有なき社會に於ては凡ての者は勞働者で、凡ての所得は勞働所得である。從て全國民所得は此の勞働者維持の爲めに充當せられて居る。故に若し勞働者維持の用に供せらるゝ生產物を資本とするならば、此場合全國民所得は之を國民資本に數へなければならぬ。さうすれば主客地を換えて、一定生產期の全生產物(新たに造られたる道具と原料とその大部分を占む)を國民所得に數へるか、或は全然國民資本と國民所得との區別を廢棄するか、孰れかに出でるより外はないと云ふのである。又一部の學者が勞働者の收得分を生活必要費と其以上の餘剩部分とに分ち、勞働續行の爲め欠く可らずとの理由を以て前者を國民資本に數へて、後者と相對しめることも、亦 Rodbertus の不合理とするところである。謂へらく、成程生活必要資料を欠くものは、必要なる道具原料を欠くものと同じく、生產に從事する事が出來ぬ。併乍ら其人が生活資料の欠之を憂ひるのは、其が爲めに生產を行ふ事が出來ぬからではなくて、其が爲めに生活を營む事が出來ぬからである。「消費を(假令其一部分でも)生產手段となし、生產を却て目的となすは、經濟的の順序を、顚倒し、目的手段に引下げ、自由人格を再び奴隸と見る所以である。」(262)

財の持續性も亦資本財所得財の區別の標準にはならぬ。若し此標準に據る分類を徹底せしむれば、欲望滿足手段を消費財と使用財とに分ち後者(例へば衣服の如き)は之を資本財中に數へなければならぬからである。所詮資本と所得との區別は財の用途如何、即ちそれが直接欲望の滿足に充當せられるか、又は生產の用に供せられるかの外に其標準を求める事は出來ないのである。

又資本の本質を生產力の增進に求める說の不當なるは、國民經濟に於ても孤立經濟に於けると異なる所はない。若し資本の本質が生產力を增進せしむるに在るとすれば、第一に原料は之を資本から除外しなくてはならぬ。第二に道具の利用に由て生產高が豐富になるのは事實であるが、その道具は豫め勞働に由て造られたもので、畢竟、孤立經濟の場合に經濟主體が其時間(即ち勞働)の一部を道具生產の爲めに割き、其道具を利用する事に依て生產高を豐富にすると同樣に、國民勞働

の一部分が道具の生産に充當せられ、他の部分がその道具を利用して所得財の生産を行ふと云ふに過ない。之に由て生産力の增進を來すとすれば、それは道具生産に充當せらるゝ勞働か、或は道具を利用して生産を行ふ勞働か、又は其の双方か、何れにしても國民的勞働以外のものに之を歸する事は出來ぬ。

十六

土地資本の私有なき社會に於て國民資本は如何にして發生增加するか。Rodbertus は勿論その勞働に由て發生し、勞働に由て增加する事を主張するのであるが、此主張を明にする爲めには資本は貯蓄に由て發生增加すと云ふ有力なる異說を反證しなければならぬ。彼は謂ふ、貯蓄なる語は二の意味に解釋される。財を蓄積 zu einem Vorrath ansammeln すること、及び財を自家直接の消費に供用せずして、更に再び生産の用に充當することが是である。併し資本とは道具及び原料の謂であるとすれば、苟も國民生産が其常態を持續する限りは蓄積せらるゝ事はない。穀物は磨粉場に運ばれ、穀粉は製麵包師の許に致される。同時に水車や燒麵竈は築造せられると直ぐに使用される。故に國民的生産が何等かの原因に由て停滯するに非ざる限り、原料及び道具は何處に於ても蓄積(寧ろ堆積)することはないのである。又貯蓄なる語を第二の意味に解すれば、原料道具は元來直接消費に供せらるゝ事なきものである。從て其消費を節すると云ふ意味で、貯蓄せられる事は元來不可能なのである。彼は此點に於て J. S. Mill を引用し來つて其貯蓄說に反對する。Mill は假に一定數の個人若くは家族が、一定面積の地上に來住して、自勞自活を營む場合を想像し、此場合にも彼等は次季の播種に必要なる丈けの穀物は消費を節して保存しなければならぬと說明したのに對して、(271) 之は材木を採伐したものが、其一部分を以て机を造り、他の部分を以て道具を造つた場合と理に於て少しも變りはないが此の材木の後の部分は果して節約(貯蓄)されたものと云ふ事が出來やうかと云つて居る。(併し、之が節約でないと言明する事は必しも人の同意せぬ所であらう。)「國民資本を構成する原料と道具とは、明かに蓄積せらると云ふ意味に於ても、又消費を節して留保せらると云ふ意味に於ても貯蓄せらるゝものではなくて、……國民的勞働に由てのみ發生し增加する……」ものである。(272)

國民資本の增加に就て云へば、孤立經濟の場合に於けると同じく、その增加を測

定する標準は二つある。資本を構成する貨物量と、資本が代表する費用額(即ち此場合には價値額)とである。前者を標準とすれば、國民資本を增加せしめるものは國民的勞働の生産力增進であるし、後者を標準とする場合には、それは國民的勞働量增加の結果としてのみ生じ得る。然るに國民的勞働量の增加は二の方法で行はれ得る。第一は生産力に異同のないものとして、一國民が他國民よりも生産を行ふ事が乏しい爲めに、その繼承保有する資本財從て其の代表する價値額のより大なる場合、第二は生産の各段階に於てより多量の勞働が生産に投せらるゝ場合である。此の第二の方法に於ける勞働量增加の最大働因は人口その者の增加であるが、休日の制度、勞働時間の延長、小兒の生産從業も亦その程度は低く、範圍に限りはあるが兎に角同じ效果がある。何れにしても國民資本の增加が勞働に由てのみ行はれる事と云ふ Rodbertus の意味は明白であらう。併し經濟學者が資本は節約又は貯蓄に依て生ずと云ふ場合には必しも原料、道具其者の貯蓄と云ふ事のみを考へては居ない。是等の資本財を造る爲めには、それを生産する勞働者を養ふ丈けの食料、一般的に云へば所得財が豫め蓄積されなくてはならぬ。少くも國民資本が生産者員增加の結果として增加する場合には、此の新生産者を養ふ丈けの食料が豫め存在しなければならぬと謂ふのである。併し Rodbertus は此見解にも同意しない。何故と云ふに、彼れの說明に從へば、抑も勞働者增加の行はれる方法は二つある。一は平均年齡が延長する事、二は出生率が上進することである。第一の方法で勞働者數が增加する場合は、たゞ消費しつゝ生産する者の生存期間が延長されると云ふ丈けであるから、食料蓄積の問題は起ない。第二の人口增加の場合には、一夫婦が生み、從つて養育すべき子女の數が增加するのであるから、子女が成長して自から生産に從事し得るに至る迄、父母は從來よりは一層節約的に Spärlicher 生活しなければならぬ。併し此の節約的に生活すると云ふ事は經濟學者の所謂貯蓄節約 Sparen と其意味同じでない。加之右は子女養育の期間父母の生産力に異同なきものと假定しての論であるが、通常は此期間に於て生産力は增進する(Rodbertus その理由を示さず)。從て此意味に於ける節約も不必要である。Rodbertus も、J. S. Mill の引例にあるやうに、(279) 奴隸の所有者が、奴隸をして繼續せ但ししめ、或は所有奴隸の數を增さんが爲めには、生産物全部を自己の享樂に費消

せずして、其一部を奴隷飼料として留保しなければならぬ事を承認して居る。併し、之は奴隷制度と云ふ特定の法制に依て必要となつたので、自然的經濟過程上必要なのではない。即ち上述の「場合に於ては生産者と其生産物との間の自然的經濟關係は全然廢棄されて居る。此場合、生産者には彼の生産物、即ち彼れが造るところの生産物は歸屬しない。彼は其所有から除外せられ、生産物はそれを同じく己れの生産物と稱する、但し經濟上の意味でなくて法律上の意味に於て己れの生産物と稱する他人の手に歸屬する。此の非生産者、但し生産物所有者は、生産者をして更に勞働せしめる爲めに、其生産物、即ち法律上の意味に於ける生産物から節約をしなければならぬ。彼はその生産物の一部分を費消せずして、その生産物を奪はれたる生産者維持の爲めに充當しなければならぬ。而して此の生産者にはその勞働力維持の爲めに必要なる丈けが還附されなければならぬのである。」(280)即ちRodbertusに從へば自然的經濟過程のみを眼中に置けば、資本の成立增加はただ勞働に依てのみ行はれる。資本が貯蓄に由て發生增加すと云ふはたゞ、一定法制を條件とする私的資本に就てのみ云はるべき事なのである。即ち「或者が一切の生産物は或者が之を造り、他の者に一切の生産物は或者が之を造り、他の者に一切の生産物が屬するやうな社會狀態が存する時は、後者は前者に、兎に角彼等が生産を繼續し得る丈けを生産物の中から殘さなければならぬ。」併乍ら自然的生産過程上に於て、資本成立の爲めに貯蓄は果して必要なるか否かの問題に就ては「彼の法律に依て造られたる、經濟學の立場からすれば人工的なる社會狀態は何物をも證明しない」のである。(280, 281)

十七

國民資本は如何にして再生産せらるゝか。云ふ迄もなく勞働に依て行はれる。孤立經濟の場合に經濟主體が其時間の一部を道具と原料との生産に割いたと、同樣に吾々は今想定せる社會に於ては、各種生産の最終段階に於て絶えず所得財が生産さるゝと同時に、其以前の諸段階に於ては絶えず原料道具の生産補充が行はれるのである。(286-288)此點の關しては、Rodbertusの説明には難解なる何物もない。

最後に國民資本と國民所得との關係は如何。此點に於てもRodbertusは孤立經濟下に於ける資本と所得との關係に關する言説を反覆する。一國民も孤立主體

と同じく道具と原料とを造り、その道具を以てその原料から所得財を造るに過ぎぬ。國民資本も國民所得も兩者共に等しく國民勞働の、而して國民勞働のみの產物である。唯國民資本の大小と國民所得の大小とは並進する。即ち勞働生產力が增進すれば國民資本も國民所得も共に量に於て增加し、人口增加の結果として、國民的生產物が價値に於て增加する。乍併此の並進關係あるは決して國民所得が國民資本の所產であるが爲めではなくて「國民的資本も所得も、兩者共に同一なる、其以外に存する力、即ち國民的勞働、に由て造られ、且つ動かされるからである。(S. 288)

Rodbertus は資本を以て所得の源泉と爲すの說を、資本當體と資本財產、國民所得と個人所得との混同に歸して居る。即ち土地資本の私有せらるゝ現社會に於ては、資本所有者は生產上一指をも動かす事なく、而かも所有資本の價値の減損なくして、定時的所得を收受することが出來る。此事實を見て多くの經濟學者は資本を所得の源泉と爲すのであるが、玆に所謂所得の源泉は實は資本ではなくて、資本所有 Kapitalbesitz である。而して此所得は Rodbertus に從へば現行法制の力に依て、勞働生產物の一部が生產者の手から資本私有者の手に奪はれたものに外ならぬのである。此に到つて土地資本の私有行はるゝ現社會に於て、私的資本又は資本財產なる假象が如何に資本實體の觀察を妨げつゝあるかを論じなければならぬ。

十八

土地資本の私有せらるゝ社會では國民生產物はその生產全過程を通じて常に生產者以外の私人の所有に屬する爲め、生產物は常に交換の手段に由て一段階から他の段階に移り、生產者は其の生產全價値を收得せずして、その得分は生產力の增進と共に益々比較的に減少し、また此の分配の不平等あるが爲めに社會の一部の爲めに絕對的生活必需品が生產さるゝと同時に他の部分の爲めに最高奢侈品が生產せられ、然らざる場合よりも生產物の種類は遙かに多樣となるの相違はあるが、自然から原產物が採取せられ、漸次生產段階を歷進して原產物が半製品、半製品が製造品となり、而して生產の最後の段階から消費の手に移る大體の徑路に到つては土地資本の私有行はるゝと行はれざるとに由て異なるところはない。國民を一單位と見、國民生產物、國民資本、國民所得の一所有者と見、資本當體を一全國

民の立場から見れば、場立經濟に於ける資本及び土地資本の共有の行はるゝ分業經濟に於ける國民資本に對すると同じ事が此場合の資本に就ても云はれなければならぬ。即ち今の場合にも、苟も資本と所得との區別を撤廢し、若しくは其位置を顚倒せざる限り國民資本に數ふべきは國民生產物中、原料及び道具を以て成る部分、國民所得に數へらるべきは社會その者若しくは個人の直接欲望充足手段を以て成る部分である。而して其の發生增加、及び兩者間の關係に就ても既述の說明を悉く反覆することが出來る。「土地及び資本の所有は相交易する個人に關してのみ重大なる影響がある。國民を一單位として見ればその個人に及ぼす影響は消滅する」のである。

以上の立場から Rodbertus は特に之の點を擧げて自說を强調する。第一、貨幣は國民の立場から見て資本に屬するか否か。彼の所見に從へば貨幣は國民資本に屬せずして國民所得に屬すると云ふ。蓋し社會が例へば司法の爲めに裁判所の建物を要すると同じく、社會的に造られにる國民生產物を適當に分配する爲めの手段を必要とする。貨幣は社會の此の直接欲望を滿たすものであるから當然國民所得に屬すると云ふのである（293-4）が、此說の對照として直に想起されるのは Adam Smith の資本分類である。Adam Smith は個人所有の Stock（財の蓄積）を直接消費に充當せらるゝ部分と、所得贏得の手段として用ゐらるゝ部分即ち資本とに分ち、更に後者を所有者を更へる事に依て所有者に利潤を齎らすか、又は同一人に繼續保持せられつゝ收入を齎らすかに依て流通資本を固定資本とに區別したる後、進んで一國若しくは一社會の Stock を同じく直接消費用の Stock 固定資本及び流通資本の三部分に分つ。而して更に此の謂はゞ社會的流通資本を構成する部分として（イ）貨幣、（ロ）賣手の手中に在る食料品（ハ）衣服家具家屋の原料及び（ニ）未だ消費者の手に歸せず、製造家又は商人の手中に存する完成品を擧げて居る。然るに是等の流通資本は貨幣を除くの外何れも究極自然、即ち土地鑛山及び漁業の產物を以て補充せられ、而して其終極の運命は固定資本となるか、又は消費者の手に歸して消費せらるゝか何れかであるが、唯貨幣丈けは他の流通資本と趣を異にして寧ろ固定資本に近い。蓋し貨幣は生活必要品、便宜品、娛樂物を適當なる割合に於て社會各員に分配する作用をなす交易要具 instrument of commerce であつて其自體

消費財たること、從て社會若くは個人の所得 revenue の一部を形成する事がない。故に曰く「それに依て社會の全所得が規則正しく一切社會各員の間に分配せらるゝところの貨幣は其自身その所得の如何なる部分をも成す事なし。流通の大車輪はそれに依て流通せしめらるゝ財とは全然異なる。社會の所得は全然それ等の財を以て成り、之を流通せしむる車輪を以て成らず」と。(Wealth of Nations, edited by Cannan vol I p. 272) Smith と Rodbertus と兩說の何れが正しきかは强ち裁定を必要とせぬ問題であらう。消費財の分配に貨幣の欠く可からざることに就ては議論はない。たゞ之を欲望滿足資料分配の手段に過ぎぬものと見るか、或は社會は斯る手段を欠く事能はざるものなるが故に貨幣はそれ自體此の直接欲望を充足する謂はゞ一種の消費財なりとするかに依て、二家の孰れかゞ正しきものとなるに過ぎぬ。但し Rodbertus の意見を一貫すれば一切の交通交易の機關設備一切は貨幣と同じく社會の直接欲望を充たすものとして之を國民所得中に數へなければならぬ事は論を俟たぬであらう。(Böhm-Bawerk, Positive Theory of Capital 1891 pp. 66-參照)

第二に勞働階級の所得は國民所得に屬するが、國民資本に屬するかの問題がある。財產所得即ち利潤及び地代に就ては問題なく、何人もその國民所得を形成することを疑はぬが、賃銀に至つては、その同じく國民所得の一部をなす事は之を認めるものと認めぬ者とあるが、之を國民資本の一部と數ふる事に於ては多數經濟學者が一致して居る。此見解は賃子を構成する所得財は生產に依て始めて造られるに反し、賃銀財は道具及び原料と同じく、生產若しくは企業開始以前に豫め存在するものとの考へに基いて居るが、Rodbertus は此の考へ方を否定するのである。謂へらく凡そ賃銀の支拂は生產物賣却以前に行はれるか、或は賣却を俟つて其收益中から支拂ふかの孰れかである。前の場合には企業家が豫め賃銀支拂の資金を持たなくてはならぬ事は明白であるが、之は私的資本に屬するもので、此に論ぜらるべき資本當體とは全く別物である。賃銀財勞働者の消費すべき生產物、その著に至ては、成程賃銀支拂期日以前には存在することを要するけれども生產開始以前に存する必要はない。而して賃銀支拂は常に一日、一週、若しくは一箇月間生產が行はれた後始めて行はれる。一勞働者が一定の生產部門で勞働しつゝある同じ一日一週、若くは一箇月の間に最終生產段階に於ては賃銀財又は所得財が造

られて居るのである。故に彼等は豫め生產開始前に存する生產物の中からではなくて特定の期間内に彼等が造出す、生產物の中から賃銀を支拂はれるのであつて、此點に於て賃子を構成する所得財との間に何等の差別を設く可き理由はない。從て賃銀財のみが獨り該生產の資本に數へらるべき理由もないのである。次に賃銀が、生產物支拂を俟つて其收益中から支拂はれる場合には、其時迄勞働者の生活を支へる賃銀財は該生產の資本と見なければならぬと論者は謂ふのであるが、之は勞働者が前期に受けた賃銀若しくは所得であつて、賃銀はそれに對して資本たるか所得たるかを決しようとして居る、問題の生產の爲めの賃銀ではない。加之當期の所得受入までを支へるに前期生產からの所得を以てする事は勞働者に限つた事ではなくて、地主及び資本家も新生產から新賃子を收める迄は、前期の賃子財を以て生活するのである。此點に於ても賃銀財と賃子財とを區別すべき理由は立たぬ。故に賃銀財と賃子財とは共に等しく國民資本を形成するか、或は共に等しく國民所得を形成するか何れかでなくてはならぬ。而してその之を國民資本と認む可からざる理由は既に再三説明した通りである。(294-303. Zur Erkenntnis. S. 14 ff.)

「第三に以上説明する所に依て賃銀財その者は奴隷所有者が奴隷維持の爲めに自己の消費を節約すると同じ意味に於て節約せられる事もない。勞働者は自らこれを消費して貯蓄せず、企業家は既に勞働者に配當せられた賃銀財に對しては最早處分權を持たぬ者であるから、奴隷所有者が奴隷の生活費を貯蓄したやうに勞働者の爲めに貯蓄を行ふことは出來ないのである。

十九

以上の説明に依て、分業の有無、土地資本に關する法制の如何に論なく、資本當體は常に原料と道具とを以て成り、勞働に依て發生增加し且つ所得に對しては因果の關係でなくて、單に先後の關係に立つと云ふ Rodbertus の主張は明にせられたと思ふ。然るに「資本當體、資本物體、國民の見地よりせる資本と全然違ふ或物が今日通常資本なる語に依て了解せらるゝ私的資本、資本、財產、所有資本で」(304)ある。而して經濟學に最不幸なる混亂を招致するものは此二者の混同であると謂ふ。たゞ Rodbertus「資本論」は未完の儘遺されたので、私的資本は何を以て成り如何にして

發生增加し、所得に對して如何なる關係に立つかの說明は甚だ不充分であるが、私的資本が一定の法制を條件として始めて成立し而して其法制は歷史的產物で時代に依て或は興り或は亡びるものなる事は彼の反覆力說して已まぬ處である。現社會に於ては曾に個人的所得のみならず、土地その者、並に最初の段階から最後の段階に至る迄の國民全生產物は生產者以外の第三者の私有分 Privateigentumsloose に分たれて居り、而して此私有分は其所有者に國民所得の分前即ち賃子を與へる。然るに一切の土地、並に所得として分配せらるゝ迄の國民生產物が生產者以外の私人の手に屬するものとすれば國民生產物並に國民所得の運動を支配するものは社會其者ではなくて、是等私有分の所有者でなくてはならぬ。即ち生產は是等の私有者が勞働者を結合しそれを自家の企業として起す事に由てのみ營まれる。而して斯る狀態の下に於ては生產經濟經營の爲め斯る私有分は欠く可からざるもので、例へば原生產を營まうとするものは原生業に必要なる土地生產物道具其他に對する私有權を有し、製造業を營まうとするものも亦それに必要なる原料道具等に對する私有權を持たなければならぬ。今 Rodbertus が私的資本と稱するものは「生產企業の經營に必要なる生產物私有分」Privateigentumsloos am Nationalprodukt で、從來經濟學者が資本と稱するものが是である。彼は別の所で之を廣義の資本と稱して狹義の資本即ち國民資本に對立せしめて居る。それは既に彼れが一八四二年の著 Zur Erkenntnis の中に行ふところで、今「資本論」の欠を補ふ爲め其一節を引用すれば曰く、「…狹義若しくは本來の意義に於ける資本は之を廣義の資本又は企業基金と區別しなければならぬ。前者は道具及び原料の現在量を包含し、後者は今日の分業關係と一企業經營の爲めに必要なる基金 Fond 全部を包含する。今日の關係に依れば一企業家の基金は曾に原料及び道具のみならず、生產收益の中から必要なる賃銀及び賃子を支拂ふに足る丈けの貨幣を含まなければならぬ。此の兩部分は企業家に取ては同じ價値を持つ。兩者は共に財產である。つて企業は經營上に於て贏得するところのものを全基金に對して算當するのである。更に兩者は單に企業家に取てのみならず、現在關係の下に於ては一生產の經營又從つて開始の爲めに等しく必要である。故に人がその限りに於て兩者を廣義の資本若しくは企業基金の概念の下に一括するのは正當である。たゞ兩者

各それ自體を取つて見れば著しい相違が顯はれて來る。兩者の中の一方のみが生產開始に當て現實に存在する財量で、他方は差當り何等現存の物財量を代表せず、又代表すべき筈なく、唯々未來生產物の分前を代表し、その(生產物の)決濟の用を爲す流通手段の蓄積に過ぎぬ。……前者のみが國民資本の概念と一致する」と(S. 23-4)

而して資本、當體とは違つて私的資本は貯蓄に依て發生し、(S. 173)所得に對しては其源泉たるの關係に立つものである(S. 288-9)

乍併此意味に於ける資本は土地資本が私有せられ、生產者は其の生產全價値の僅かに一部分を以て酬ゐられる社會に於てのみ必要となり且つ存在するもので決して本質的、永久的經濟概念ではなく、それは僅かに流轉常なき諸國民の法制史から生れるに過ぎぬ。資本當體、國民資本は生產其者の本質進步に由來する絕對的の意義を有する。國民的生產其者が廢止せられぬ限り、原料と道具は常に必要であり且つ存在し、國民生產物は完成所得財と、更に生產の用に供せらるゝ財とに岐れるであらう。反之私的資本は一定の法制關係の存續社會的生產行程の一定形式即ち生產行程が土地並に資本私有の爲めに取得する形式に關係する相對的意義を有するに過ぎぬ。國民的生產物の中で私的資本の實內容を形成する部分が常に私有物なる事、常に私有分として現はれる事は決して不可欠の必要事ではない。前述の如く別の社會的法律關係は此事を不用にするであらう。故に新經濟學者が、貨幣資本を眞資本、資本當體と認めたる事を以て舊經濟學者を咎めるならば、新經濟學者は私的資本を眞資本、資本當體と認める事を以て咎められなければならぬ。此意味に於ける資本は資本所有なる法制の爲めに必要となるので、決して人の主張するが如く資本の爲めに資本所有が必要となるのではない。即ち土地は有ゆる社會關係の下に於て生產に必要であるが、今日の意味に於ける土地所有權は必要ではない」(S. 314-15)のである。

Rodbertus 資本論中の個々の結論は今必しも其當否を評する事を須ゐない。彼の資本は常に直接欲望充足資料を以て成る所得に對して、更に生產の用に供せらるべき生產物を以て成り、又資本は常に勞働に由て發生增加するもので、決して貯蓄に由て發生增加するものでないと云ふ等の說に對しては議論の餘地は猶ほ充

分存するであらう。資本は貯蓄(又は節約)に由て生ずとの説に對するRodbertusの批評は殊に首肯し難きものである。資本當體即ち原料道具は元來直接消費に適せざる物であるから、その消費を節するの意味に於て資本は貯蓄に由て發生する筈がないと彼は主張するが、固より機械は節約に由て發生するのではなくて、製作に由て發生する。併し之を製作する爲めには直接欲望充足資料以外のものに投じ得べき生産餘力ある事を必要とする。此の生産餘力は固より生産力の增進に由ても生ずるが、又生産力の程度を不變としても明かに現在生活生活費の短縮に由ても生ずる。此意味に於て資本當體は惜かに節約に由て生ずと云ふ事が出來るのである。參照 Böhm-Bawerk, Positive Theory pp. 119—)併し、予の見る所を以てすれば是等の點に對する批評は最も重視せらるべきものではない。彼の研究の眞價は寧ろ、その人間經濟生活上の現象を觀察する上に於て人間對自然の關係上謂はゞ必然的に(欲望充足の爲め人間が勞働に依て外界物を獲得する必要の息まざる限り、必然的に)生ずる恒久的の要素と、人對人の關係を律する史的産物なる一定の法制の備はるを俟て始めて生ずる一時的の要素とを辨別するの法を敎へた點に存するであらう。而して彼はその一實例として、資本當體を取り、孤立經濟社會主義國民經濟、及び資本主義國民經濟の社會に於て、その本質、發生、增加、その對所得の關係に關する四問に對して常に同一解答の與へらるゝ事を具さに論證した。彼の「永久的本質的經濟概念」と法制的經濟概念との區別はA. Wagnerの繼承するところとなつて「純經濟的觀察(範疇)」と「法律的歷史的觀察(範疇)」との區別となり、此區別は更に多くの學者の採用するところとなつた。而して此區別は資本論以外に猶ほ廣き應用範圍を有するものと信ずる。故にRodbertusの貢献は個々の理論よりも、寧ろ甚だ價値ある一の考へ方(Methode)にあつたと云つて宜からう。彼は此考へ方の應用を既にその初期の作 Zur Erkenntnis に於て示して居るが、das Kapital に到つて始めて其れの根據を具さに論證した。未完結の狀態で公にされた此遺稿は猶ほ久しく學者論評の主題となるに堪えるものと信ずる。(完)